

## 高校生・大学生のための国際キャリア入門

### Chapter11：大学生国際ボランティアから、現地生活レポートとアドバイス

関西学院大学は、2003年10月に日本の大学機関としては初めて、国連開発計画（UNDP）の下部組織である国連ボランティア計画（UNV）との間で、学部生・大学院生を国連情報技術サービス（UNITeS）ボランティアとして派遣する協定を締結して、発展途上国へ学生を派遣してきました。現在は、国連ユースボランティアと国際社会貢献活動に発展しています。そこで、本Chapterでは、その記録『学生たちは国境を越える』から、現地生活でのエピソードや、現地生活でのアドバイスをまとめてみました。高校で海外フィールドワーク等を実施する場合の御参考になれば幸いです（文章一部改）。

#### アフリカ・マダガスカルから現地レポート

“Manao ahona！（マナウアーナ / こんにちは）” 現在、私はアフリカ南東に浮かぶマダガスカルという国にUNITeSプログラムを通じて派遣されています。UNV マダガスカル事務所と国際NGO “Water Aid Madagascar” で、水衛生の改善を目的として啓発ポスターの製作、写真撮影を行っています。

マダガスカルといえば皆さん何を思い浮かべるでしょうか？ 星の王子様のモデルにもなっている「バオバブ」、 「キツネザル」などのマダガスカル固有の動植物、また映画「マダガスカル」を思い浮かべる方もいらっしゃるかもしれませんね。一見、日本とは馴染みのない国であるマダガスカルですが、先住民がもともとマレーシアやインドネシアから渡ってきたアジア系の人々とも言われており、人々の顔立ち、文化にアジアを感じる感じがしばしばあります。

特にマダガスカルの人々は非常に多くの「お米」を食べるということに驚きました。なんと一人当たり年間約200kgもお米を食べているそうです。日本人の年間消費量の平均が約60kgということなので、3倍以上のお米をマダガスカルの人たちは食べているという計算になります。マダガスカル人の友達と食事に行くと、決まって「もう食べないのか？ 体調でも悪いのか？」と突っ込みを受けています。日本では「まだ食べるのか！？」と突っ込まれるので、これも一つの異文化体験であるのでしょうか。

UNITeSプログラムで派遣されなければ、恐らく来なかったであろう「マダガスカル」。この地で多くのものを吸収すると同時に、少しでもこの国の「発展」のための力になるよう残りの期間の仕事に励んでいきたいと思います！！



マダガスカルの田植え

#### 中央アジア・キルギス共和国から現地レポート

私たち4人（男性1、女性3）は、UNITeS ボランティアとして、中央アジアに位置するキルギス共和国のUNV 事務所や現地NGOに派遣されています。首都ビシュケクにあるアパートで共同生活を送りながら、家事全般を自分たちで行っています。ビシュケクでの生活環境は日本とはそう変わらず、街にはスーパー、映画館、美術館はもちろん、インターネットカフェやコンビニまであります。

この街で人々の足となっている乗り物が『マシュルカ』というマイクロバスです。ルートと行き先は決まっていますが、ルート途中のどこからでも乗れて、どこでも降りることができます。「アスタナヴィーチェ！（止めて）」と運転手に声をかければ、そこが道の真ん中であろうと止まってくれるのです。こちらへ来て間もない頃は、ロシア語で書かれている行き先を読むことができず、一か八かで、来たバスに飛び乗り、幾度と無く見知らぬ土地で泣く泣く降りるはめにありました。しかし、今ではキルギス人に席を譲る余裕が出てくるほどにマシュルカを使いこなせるようになってきました。

日本では経験したことのない冒険を日々重ね、私たちもたくましく成長しています。残りの派遣期間、キルギス共和国の発展に貢献できるよう、ベストを尽くしていきたいです。



キルギスタンの友人と

#### モンゴルにて

##### モンゴル語 Web サイト

モンゴルについて紹介しましょう。この国は中国とロシアに挟まれ、日本から飛行機で約5時間、面積は日本の約4倍、人口は約250万人、そのうち約100万人が首都のウランバートルに住んでいます。産業は主に鉱業、牧畜業等ですが、現在IT産業を活性化させようという動きが盛んになっています。

モンゴルでは1990年代始めに、体制が社会主義から資本主義に変わってから、急速に経済が発展し、都市化が進みました。とくにウランバートルでは、ビルが建ち、車が増えましたが、地方ではそれほど発展していません。このように首都と地方の村に大きな格差が生まれています。

私たちが取り扱ったとくに大きな問題が、この首都と地方、そしてモンゴルと海外とのIT格差です。例えば、首都と地方の学校の設備等の教育格差、さらに経済格差、所得や雇用機会等の格差が広がってきています。

それでは、モンゴルのIT産業の現状について説明します。モンゴル政府は2002年に「e-モンゴリア」プログラムという政策を打ち立てました。これは2012年までにIT産業で、アジアの国でトップ10入りを目指すというものです。そのおかげで現在モンゴルでは、ソフトウェア企業は約60社、IT専門家コースのある大学は20校と、どんどん増えてきています。

モンゴルではこのようにソフトウェア開発、そしてアウトソーシングの業務を促進中です。とくに、高い技術力と言語能力をセールスポイントにして、アウトソーシングの機会をのぼそうとしています。モンゴルの市場は規模が小さいため、海外に販路を拡大することが必要だからです。しかし、モンゴルからモンゴルのIT企業の情報を発信する機会がありません。

そこで、私は地元の「JMITA（ジャパン・モンゴリア・インフォメーション・テクノロジー・アソシエーションの略）」というIT支援NGOに派遣されて、IT企業のデータベース化、WEBサイトの作成・アップロードという仕事をおこないました。こうした作業では、ご覧のように日本語版、英語版、（モンゴルで使われているロシア起源のキリル文字の）モンゴル語版の計3カ国のバージョンでWEBサイトを構築しました。これによって、モンゴルのIT産業の現状を海外に発信し、海外からアクセスできる機会を創出できました。



モンゴル語Webサイト



中古PC贈呈式（モンゴル）

## 地域振興について

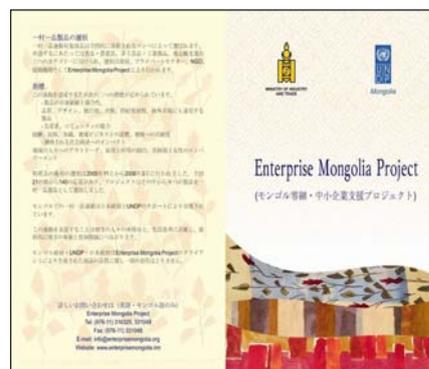
私は、2006年の12月から2007年3月まで、「エンタープライズ・モンゴリア」という、貧困削減を目的としたプログラムに派遣されました。冒頭でも触れたように、モンゴルでは社会主義から資本主義へ代わって以来、経済が急速に発展し、都市化が進みました。その結果、地方の人は取り残されてしまいました。その影響は今でも続き、地方では雇用機会も少なく、失業率も高く、貧困状況は深刻です。

このプロジェクトは、UNDPモンゴル事務所の協力のもと、モンゴル通商産業省がおこなっています。目的は、零細・中小企業、企業家に対して、ビジネス開発サービスを提供するほか、所得の向上・雇用機会の創出を図って、貧困削減を実現するというものです。この目的を達成するために次の二つの運動が導入されています。一村一品運動とローカルクラスター支援運動です。

一村一品運動とは、昭和54年、大分県の平松県知事が「地域に住む人々が自ら誇ることのできる特産品を見つけ出し、国内だけでなく国外の人々にも買ってもらえる魅力ある商品にすることで地域経済活性化を目指す」と提唱した活動が始まりです。また、ローカルクラスター支援運動は、「特定産品・サービスに従事する人々をグループ化し、グループで仕入れや製造などを協力し合うことでビジネスの効率化をはかる」という運動です。

この二つの活動には、地方センターから（1）キャパシティ・ディベロプメント、（2）マイクロ・ファイナンス支援サービス、（3）マーケティング支援、そして（4）政策対話・法整備の4つのサービスが、各地区の地方センターからモンゴルの人々に提供されています。私は、モンゴルの中央地域に属しているスフバートル地方センターと、全プロジェクトを統括するウランバートルのオフィス両方で活動しました。

スフバートルは、ウランバートルから北に340kmほど離れた、ロシアとの国境付近に位置しています。北京からロシアに続く国際鉄道の駅があって、他の地方に比べてインフラが整っています。しかし、その特性が、



作成した一村一品マーケットのパンフレット

地域活性化に活かされていないのです。失業率も、今は改善しつつありますが、まだまだ深刻です。

派遣された地方センターでは、ローカルクラスター支援運動を行っていました。同業者を集めた六つのグループを作り、それぞれにビジネスコンサルティングやトレーニング等を提供しています。私が実際に行った活動は、調査と日常業務のサポートの二つに分かれます。

まず、クラスター調査ですが、支援の対象者あるいは希望者にインタビューして、基礎データを集めました。地方の市場などを周り、スフバートルの街の情報を集めました。日常業務のサポートでは、現地スタッフへのPC指導を行いました。また、私達が帰国した後も作業が出来るようにマニュアルを策定しました。

ウランバートルでは、一村一品運動と新設される地方センタースタッフへのPC指導をおこないました。一村一品運動について、プロジェクトでは将来、モンゴルの生産品を日本に輸出したいと考えています。そのための手続きや翻訳、資料作成等のサポートを行いました。また、プロジェクトとその生産品に関する日本語版パンフレットを作りました。

2007年の2月末にモンゴルの首相が日本を訪れました。それをきっかけとして、私たちのプロジェクトの支援を受けてできたカーペットが、成田空港の一村一品マーケットに置かれることが決まりました。私達が作ったパンフレットも製品と共に置かれています。



モンゴルでの聞き取り調査

## フィリピンでの活動

フィリピン共和国の概要に触れてから、2005年度の私たちの先輩方にあたる派遣生の紹介をした後に、私たちの活動をお話します。

ご存知の通り、フィリピンは東南アジアに位置する国です。総人口は約8300万人で、そのうち約1千万人が首都のマニラに住んでいます。公用語はタガログ語及び英語ですが、約80の言語が国内各地で話されています。宗教は、国民の約83%がカトリック教徒です。

フィリピンはまた、生活において大きな格差が存在する国です。国民の約20%が1日1ドル以下の収入で生活している反面、非常に裕福な生活を送る人もいます。

皆さん、写真に写っているこの乗り物を知っておられますか？数年前に「うるるん滞在記」というTV番組で紹介されたジープニーという乗り物です。これは私の主な通勤手段で、朝の六時に起きて、これに乗って、晩の七時くらいにこれに乗って帰ってくるという生活を送っていました。乗り合いタクシーですが、すごいスピードで、車線を見失い、色んなところを走ってくれるという便利な乗り物です。



ジープニー

こちらの写真にうつっている乗り物はカレッサと言います。フィリピン海岸部では昔スペインの植民地であった名残があって、風流があって観光にはもってこいで、海岸地域ではこういったタイプの馬車が多く運行しています。かわいい馬に200ペソで乗ってみたのですが、降りてから600ペソを要求された、という中々思い出深い乗り物です。

また、UNITEs 派遣生の貴重な経験とでも言うべきものとして、地方出張時に、その地方の方が振舞ってくれたココナッツの実から直接ジュースを飲みました。注意しなければいけないのは、空腹時に飲むと、お腹が下るということです。初めて飲んだ時にそれを知らずに、昼食前に飲んでしまったので、後でえらいことになりました。また、フィリピンは、国民の約80%がカトリック教徒で、日曜になると教会のあたりではとてもにぎわっていて、いろんな出店が道路までせり出します。

次に、私たちの先輩の活動を簡単に紹介します。2005年度では、3つの機関に派遣されました。(1) 華僑コミュニティNGOであるKAISA、(2) 農業研究組織であるPRADFARM、そして(3) ボランティア仲介NGOのピノイ・リンです。先輩方はここでオンラインカタログの編集、NGO紹介のためのウェブサイトのデザインや作成に従事していました。



ナショナルハイスクールの生徒たち

■大学生が推奨する持ち物リスト

【貴重品】パスポート、航空券、現金（円・米ドル・現地通貨）、トラベラーズチェック、クレジットカード、国際キャッシュカード、海外旅行傷害保険証、重要書類コピー（パスポート）、入国ビザ書類、証明写真（ビザ用）

・One point advice: 「国際キャッシュカードは便利。ATMで日本の口座から現地通貨を引き下ろすことが可能（フィリピン）」

【カメラ・電気用品】変圧器、電気プラグアダプター、デジタルカメラ、腕時計、ノートパソコン、記録メディア（USBフラッシュメモリ、ポータブルハードディスクなど）、カードリーダー、携帯電話・充電器

・One point advice: 「現地の携帯電話を入手」（全派遣国）、「静電気防止具を持って行けば良かった。乾燥しているので、静電気がすごい」、「懐中電灯は必要。時々、停電が起きる。キャンプでは必須」（以上、モンゴル）、「音楽プレーヤーなど持ち物に注意。盗まれた」（ベトナム）

【衣類】下着・靴下、Tシャツ・セーター・カーディガンなどトップ、パンツ・スカートなどボトム（3日～1週間分）、スーツ・ドレス・革靴・パンプス（式典やパーティ用）、帽子、スニーカー、サンダル、ハンカチ

【衣類（極寒の地、冬のモンゴル編）】オーバー・コート（フード付き）、マフラー、手袋（厚手、革かフリース製）、スノーブーツ、ズボン下など冬用下着

・One point advice: 「案外、現地の人たちはおしゃれだった。洋服はもう少しおしゃれなものも持って行けば良かった」、「浴衣。パーティ用に使える。異文化交流にも」、「現地調達も可能だが、日本製の方が良質」、「ティンバーランドのブーツとズボン下は重宝した。ズボン下がないと外は歩けない」、「冬ゴルフ用下着が高いけど暖かい」（以上、モンゴル）

【その他】洗面・入浴道具、髭剃り・化粧品、タオル、折りたたみ傘、懐中電灯、アーミーナイフ、爪切り・耳かき、サングラス、ポケットティッシュ、ハンドクリーム・リップクリーム、眼鏡・コンタクトケア用品、日焼け止め、常備薬・生理用品、筆記具・ノート、ガイドブック、会話集・辞書、写真（家族・友人、日本の風景など）、文庫本

・One point advice: 「虫さされの薬。とにかく蚊が多い」（フィリピン）、「日本の文庫本は、日本センターで借り出し可」（モンゴル）、「現地フリーペーパーは情報が豊富」、「日焼け止め。日差しが強い」、「マスク。バイクの排気ガスがひどい」（以上、ベトナム）」

■お薦めアイテム

【交流編】「指差し会話帳。もはや必須アイテム。タガログ語しか話せない人とも会話できる」、「家族・友人の写真や日本の風景写真。パソコンに保存して持参。会話が弾んだ」（以上、フィリピン）、「指差し会話帳。モンゴル語に慣れるまで便利だった。ホストファミリーとの話題を提供してくれた」、「相撲の本。モンゴル人との会話が弾んだ」（以上、モンゴル）

【日本食編】「しょうゆ。まずいご飯でもしょうゆをかければなんとか食べられた」、「マスタードがホストファミリーに人気だった」、「インスタントみそ汁。たまに飲む味噌汁が救いでした」、「日本食・調味料。日本食を料理すると、モンゴル人にもものすごく喜ばれた」、「（以上、モンゴル）」、「ふりかけ。下宿の大家さんも気に入っていた」、「インスタント食品。疲れて料理したくないとき便利だった」（以上、フィリピン）

【一方、こんな意見も…】「現地の食事になじめたので、手をつけなかった」、「現地の食事が大好きで、ほとんど食べなかった。残った日本食品を処理するのに困った」（以上、モンゴル）

■お土産等

【持って行って喜ばれたお土産】「浮世絵のプリントされたマウスパッド」、「三色ボールペンなど日本製文具は使いやすいと評判でした。折り紙もツルや紙風船を折ってあげると、とても喜ばれた」、「白玉ぜんざいの素。作ってあげたら、すごく喜ばれた」（以上、フィリピン）、「扇子。しかし、ベトナムにもあった」（ベトナム）、「日本のおかし。でかいポッキーは受けました」、「カップ麺。特に、カップうどんには感動された」、「相撲の絵が書いてある手ぬぐい。モンゴルでは相撲は大人気」、「お菓子、飴、チョコレート。チョコレートはアーモンドが人気でした」（以上、モンゴル）

【一方、あまり喜ばれなかったお土産も…】「ジブリグッズ。モンゴルでは、ジブリグッズが人気と聞いていたが、子供たちの反応はあまりなかった（モンゴル）」

2018年3月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部